高知県立文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol.55

▲英光の著作や、英光がコメントを書いた、師・太宰の自叙伝

リレー随筆

わが青春の田中英光

西村賢太

おこがましくも、大層な標題だと自分でも思う。だが本来であれば、もっと夜郎自大に〝わが人生の〟とでも謳いたいところである。

実際、私は20歳時に田中英光の作品(『全集』第七巻収録の、晩年期の諸作)に初めてふれると同時、以降29歳までの十年間、この人をただひたすらに追い続けた。

この時期は、ほぼ文字通りに寝ても英光、覚めても英光の状態であったことには間違いがない。

しかし、或る事柄を境に、それまで稼ぎのすべてを注ぎ込み収集してきた英光資料も丸々手放し、この作家と訣別する流れとなった。

決して、自らでそう望んだ流れではない。

だが、私にとって小説イコール田中英光であった以上、実作の方も、その人を真似てものした習作二篇をもって、今後一切、継続の意志は抱くまいと思った。

それでもう、自分と小説との縁は、きれいサッパリ終わったはずだったのである。

が、結句(けっく)は終われなかった。

それから七年後に、私は小さな同人雑誌で小説を書いていた。

そして翌年、そのうちの一作が『文學界』に転載されて、そのまま商業雑誌に書かしてもらえることとなった。

このときの私は満37歳だったから、英光の没年齢に至ってデビューのかたちになったわけである。

で、気がつくと私の手もとには、英光の全集の揃いが再び積まれていた。最早、その作家との間に完全な隔たりがあるのを感じつつ、往時の自己の姿の再現よろしく、心寂しいときには何故かその作を読み返しているのだ。

これまでに私が書いた駄作群は、多かれ少なかれ、いずれにも英光からの影響が潜んでいる。それは一面、至極当然なことである。若年期の十年間に、一日も欠かさず繰り返し読み込んできた以上、その文章は無意識のうちにも身の奥底に染み込んでいる。

〝とまれ〟と云う副詞を、〝とあれ〟と記すのが英光の特徴だが、私はこの一語のみ、あえてその人の文を意識した上で、自らでも使用している。

まず大抵の場合、校正で疑問が出るが、これだけはどうしても直せない。

英光から、過去に数多くのことを学んできた証として、自作に一点、その明確な刻印を残しておきたいが為である。

あさましき深情けじみた行為には違いないが、この辺に〝わが青春の〟としか謳えぬ、今の距離感もあらわれているのであろう。

(作家)

展覧会紹介 Exhibition

田中英光生誕100周年記念

太宰治と田中英光展

両親が高知県出身である作家・田中英光は、オリンピック出場経験という異色の経歴を持ち、瑞々しい青春と恋を描いた『オリムポスの果実』などの作品で知られています。そして、来年2012年は、数えで田中英光生誕100歳の記念の年となります。

そこで、英光が心から敬愛していた師であり、『走れメロス』『斜陽』などの名作で知られる作家・太宰治との交流に焦点を当てた展覧会を開催します。二人の交流に焦点を当てた展覧会は全国初！　作家としての足跡や、二人の交流と影響、高知との意外な接点などをお楽しみください。

◀太宰治　三鷹の自宅にて　昭和15年春（日本近代文学館蔵）

Ⅰ　太宰治の生涯

太宰（本名津島修治）は、1909（明治42）年、青森県北津軽郡金木村に生まれました。1930（昭和5）年に東京大学仏文科に進学。小山初代と同棲します。その後、薬物中毒に陥り、治療のための入院中に過ちを犯した初代と退院後離婚。退廃的な生活に傾いていきます。今回は、この時期に書かれた「HUMAN LOST」の原稿（個人蔵）を展示します。

その後、心機一転して山梨で創作に励み、石原美知子と結婚。『津軽』『富岳百景』などの傑作を発表します。

戦後、太宰は再び退廃の毎日へ。現在も人気の高い「人間失格」（日本近代文学館蔵）の草稿も公開予定です。

また、道具に執着しなかった太宰の数少ない愛用品である万年筆（青森県近代文学館蔵）や、太宰の自画像ではないかと言われている肖像画（個人蔵）なども公開いたします。

Ⅱ　田中英光の生涯

オリンピックの選手であったという異色の肩書きを持つ作家・田中英光。英光はめまぐるしく変転する人生を歩みました。

英光は東京で生まれ、鎌倉で少年時代を過ごしました。その後、体を丈夫にするためにボート部に入部。早稲田大学時代に第10回ロサンゼルスオリンピックに出場しました。

その後、共産党への入党と転向、軍隊時代を経、戦後は退廃の日々を送ります。そうした状況でも執筆意欲は持ち続け、多くの作品を発表しますが、昭和23年、太宰の自殺に衝撃を受け、翌年師の墓前で自殺。

展覧会ではオリンピック出場に対して文部大臣から贈られた感謝状（個人蔵）や、「八方破れ」草稿（複製）、軍隊時代のユーモラスな書簡などをご紹介します。

Ⅲ　二人の親交

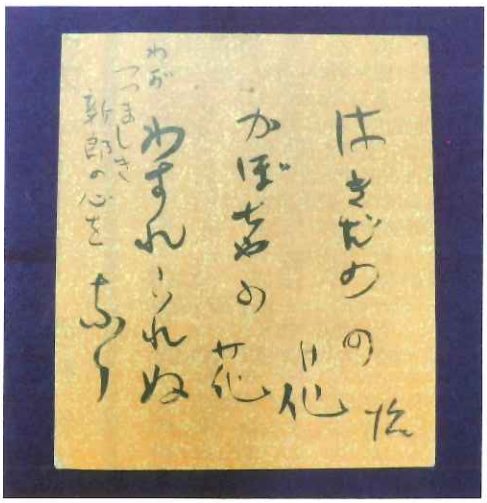
二人の親交は、文学作品においても影響を及ぼしています。自身のオリンピック出場経験をもとに書いた英光の『オリムポスの果実』は、当初「杏の実」というタイトルでしたが、太宰のアドバイスで改題、この作品によって英光は鮮烈な文壇デビューを果たします。

一方の太宰の作品『お伽草紙』中の「カチカチ山」のモデルは英光ではないかといわれていますし、『斜陽』は、英光が紹介した静岡県にある三津浜の安田屋旅館で書かれました。

「お伽草紙」直筆原稿（青森県近代文学館蔵）や二人がやり取りした書簡（個人蔵）、英光が結婚する際に太宰が贈った色紙（複製）など、彼らの深い交流をうかがうことのできる資料をご紹介します。

平成23年
11月26日（土）
▼
平成24年
1月15日（日）
企画展示室
観覧料500円

※12月27日（火）～1月1日（日）は年末年始のため休館です。



◀英光結婚時に太宰から送られた色紙（複製／当館蔵）

▶田中英光（個人蔵）

展覧会紹介 Exhibition

田中英光生誕100周年記念

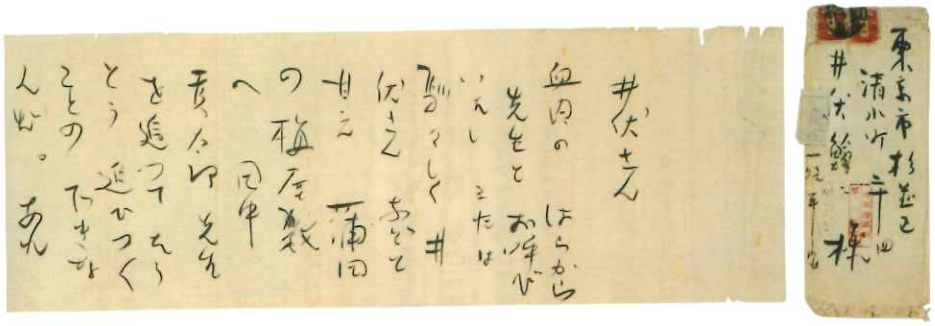
太宰治と田中英光展

平成23年
11月26日(土)
▼
平成24年
1月15日(日)
企画展示室
観覧料500円

※12月27日(火)～1月1日(日)は年末年始のため休館です。

Ⅳ 高知とのゆかり

太宰治が、高知ゆかりの作家・井伏鱒二に師事していたことはよく知られています。



▲1936(昭和11)年9月　井伏鱒二宛太宰治書簡（山梨県立文学館蔵）

しかし太宰が、井伏の師でもある高知の作家・田中貢太郎ともかかわりを持ち、貢太郎を中心とした同人誌「博浪沙」にも原稿を寄せていたことなどはあまり知られていません。

また、田中英光は、両親が高知県出身で、本籍は高知県にあり、二度高知を訪れています。

太宰の名が書かれた田中貢太郎追悼の会の芳名帳（高知県立図書館蔵）や英光の「土佐」原稿（複製）など、彼ら二人と、高知とのゆかりについてご紹介します。

Ⅴ 太宰と英光に挑戦！新しい文学館を目指して

高知県立文学館では、太宰と英光の作品世界に挑戦！ 高知県の芸術系専門学校である国際デザイン・ビューティカレッジの学生さん8名が、太宰と英光の作品世界を絵や立体造形等で表現する、文学と芸術とのコラボレーションを行います。

現在、学生さんたちから作品案が寄せられていますが、いずれも意欲的で、ユニークな作品ばかりです。どうぞお楽しみに！

（学芸課／永橋禎子）

◆関連企画のご案内◆

■記念講演会　「田中英光と太宰治」

『田中英光全集』の編集に携わり、太宰治についても造詣の深い島田昭男先生に、太宰治と田中英光についてお話しいただきます。

日　時：**平成23年12月4日(日)**　午後2時～3時30分頃
講　師：島田昭男先生（恵泉女学園大学名誉教授）
場　所：高知県立文学館1Fホール　　定　員：100名
参　加：要当日観覧券　　申　込：電話または文学館受付にて事前申込

■津軽弁を知って太宰を楽しもう！　朗読「走れメロス」と方言トーク

「走れメロス」の津軽弁の朗読「走っけろメロス」と、方言についてのトークをお楽しみ下さい。

日　時：**平成24年1月8日(日)**　午後2時～3時30分頃
出　演：鎌田紳爾氏（弘前学院聖愛中学高等学校教員）
場　所：高知県立文学館1Fホール　　定　員：100名
参　加：要当日観覧券　　申　込：電話または文学館受付にて事前申込

■作品制作者×美術館学芸員×文学館学芸員による作品鑑賞会！

国際デザイン・ビューティカレッジの生徒の皆さんが制作した、太宰と英光をモチーフとした作品に、制作者・高知県立美術館学芸員・文学館学芸員がそれぞれの視点から迫ります。

日　時：**平成23年12月18日(日)**　午後2時～　　定　員：100名
場　所：高知県立文学館1Fホール＋展示室
参　加：要当日観覧券　　申　込：電話または文学館受付にて事前申込

その他、朗読の会・文学散歩などを催します。詳細は文学館までお問い合わせください。

☆展示解説

展覧会担当者による展示解説を行います。

毎週土曜日

各日とも午後1時半～（約30分）
参加には当日観覧券が必要です。
直接会場にお越しください。

好評開催中！

市原麟一郎 よみがえれ土佐民話展

展覧会の様子をお伝えします！

台風15号の影響で大雨注意報が出た初日でしたが、オープニングセレモニーの間は青空もうかがえるほどのご利益をいただき、たくさんの方で賑わいました。もともと高校の教師を務めてこられた市原さんを慕って教え子の皆さんやお仕事仲間の方々なども県内外から駆けつけて下さいました。

◀オープニングセレモニーであいさつする市原さん

今回の展覧会は庶民の日常生活をテーマにした土佐民話です。土佐の方言を大事にしてこられた市原麟一郎さんのこだわりが、ふるさとを思う懐かしい気持ちをよみがえらせています。展覧会中は書斎を再現したコーナーで市原さんがおもてなしの心で皆さんをお待ちしています。

その一つに観覧の方にまずは2階受付でくじを引いていただき色紙や土佐の民話（小冊子）をプレゼントしています。また、ロビーには笑い地蔵や昔話をテーマにした木のおもちゃ、街頭紙芝居を彷彿させる市原さん実演紙芝居映像でお楽しみいただいています。

▲市原さんご自身による展示解説の様子

たどころのりあき・絵

展示室内では、【第一部　市原麟一郎の「いきいきと生きる」極意】は現在に至るまでの道程を紹介。【第二部　神仏ごりやく巡り】は高知県下くまなくご自身の足で取材された成果を紹介。【第三部　戦争民話】は体験者の証言メモやテープを中心に防空壕など体験型で紹介。【第四部　おどけ者】は土佐人気質の陽気なおどけ者（25体）を爆笑長屋で紹介。【第五部　紙芝居】は市原さんが紙芝居に出向いた公演記録とともにまだまだ広がる伝承活動を紹介。

どの世代（親・子・孫）も異なった感動を体感していただいています。

この機会にぜひ文学館へ足を運んで土佐民話の魅力を感じてください。

（学芸課／門田貴美子）

▲「麟一郎と和郎のいきいき対談」の様子

市原麟一郎 よみがえれ土佐民話展

平成23年 **9月17日（土）～11月13日（日）**

会　場：高知県立文学館2F　企画展示室　**会期中無休**

観覧料：400円（常設展含）　開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

土佐文学さんぽ 54

遍路道の渡し ―宮尾しげをの画と文の旅―

猪野 睦

いまでは物部川の神母ノ木橋から下の河口まで4本の橋があるが、戦前、戦後までは後免から野市への県道にかかる十善寺橋があるだけだった。戦後しばらくもまだ春先きになると、十善寺橋に沿う鉄橋を渡る安芸行の電車の音が風にのって、土佐山田まで聞こえてくることがあった。車もそう走っていない静かな時代だった。

物部川にはこの橋が一本だけで、あとの物部川の交通は渡しだった。棹をさす渡しで賃をとっていた。そのひとつが戸板島の渡しだった。ここは遍路道にもなっていて野市の28番大日寺から次の29番国分寺までは、この戸板島を渡りあと2時間近く田園の続く田舎道を歩かねばならなかった。

昔は国分寺前の国分川も渡しだった。200年前の文化7年の刻のある花崗岩の地蔵菩薩があり、ここの渡しも国分寺への遍路道のひとつだった。

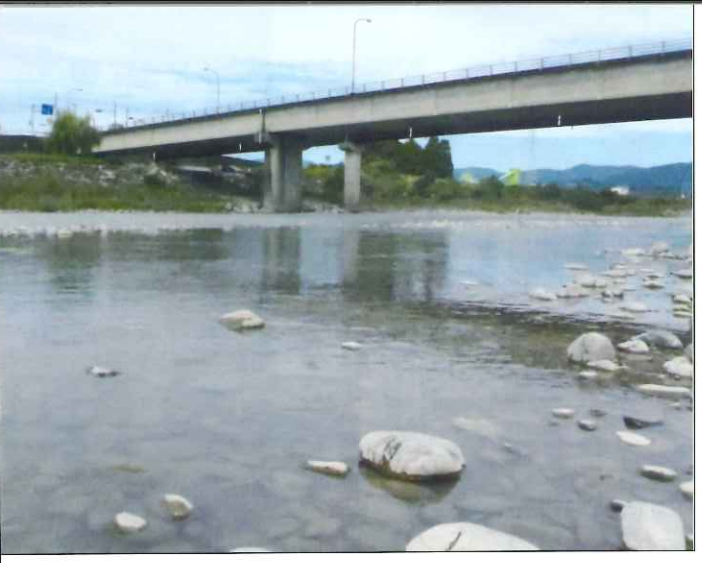
宮尾しげをの「画と文四国遍路」がでたのは昭和18年だった。スケッチしながら歩いた遍路記である。宮尾しげをは前年の初夏、太平洋戦争の戦勝気分に皆が酔っている時代、徳島の霊山寺から始めて高知の甲浦へ入る。そこから乗合自動車で室戸へ、唐の浜の神峯神社へ、浜の遍路宿で20銭の宿代と米三合代を払い、翌日野市までバスに乗り大日寺へ歩いた。また歩いて戸板島で3銭の渡し賃で対岸へ、あと早稲の生育する田舎道を国分寺へ急いだ。リュックサックを背負い、岡豊の八幡から高知へは、バス代がないという遍路にバス代を献金したりする旅だった。

このあと西へむかい高岡の町では山桃一升60銭で売りにくるのに出会ったりしながら、足摺の金剛福寺へたどりつく。清水からは汽船で宿毛へでて平田の延光寺をまわり、宿毛から宇和島へ抜ける五泊六日の土佐路の記録だった。絵とともに和ませるものがあった。

先日みた戸板島のかつての舟付き場近くには地蔵堂があり、今でも遍路が立ち寄るのか線香があったが、ここから対岸まではずい分と距離があった。今では大きな堤防がその前に横たわり川も半減していた。上流のダムのせいで水量もへりやせた川になっていた。

かつては渡し賃をとるだけのゆったりした水量の川だったのかとあらためて思った。先日も今は車の往来する大きな戸板島橋を歩いて国分寺へ急ぐ遍路姿を見た。かすかに記憶を残す遍路道のひとつである。

（詩人）



◀かつての戸板島渡しあたり

資料受贈報告

―寄贈資料から―

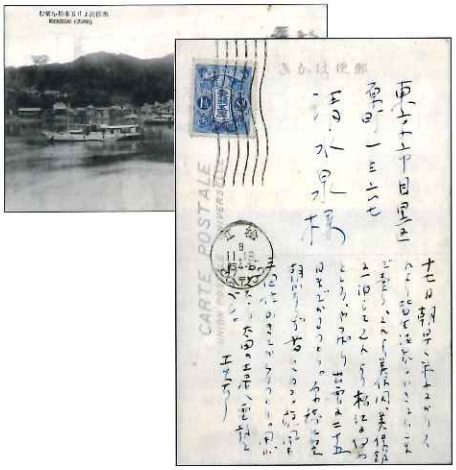
「清水泉宛 田中貢太郎書簡」

清水源太郎氏寄贈

（絵葉書「美保灣より五本松を望む MIONOSEKI（IZUMO）」）

1933（昭和8）年11月18日消印

発信地：松江 受信地：東京市目黒区原町



「十七日朝早く米子におりそれより皆生温泉にゆきてひるまで賣り、これより美保関、美保館に一泊してこれより松江に向ふところ、やっぱり出雲に二十五日までおるつもり。原稿は翌朝かならず書いてゐる。旋風も三回位かきておくりつもり。用ができたら太田の土居へ電報を打つべし。 貢太郎」

宛先の清水泉氏は田中貢太郎の門人であるとともに娘婿だった人物で、田中貢太郎が主宰した随筆雑誌「博浪沙」（昭和9年8月創刊）の編集・発行に携わっていました。

右写真の書簡は昭和8年11月に田中貢太郎が出雲石見旅行に行った際に清水泉に送った書簡です。この旅行のことについては田中貢太郎著『随筆 杖頭銭』（1935年學藝社発行）の「出雲石見紀行」に詳しく書いてあります。旅先の出来事やその土地の言い伝えなど細かく記してある中にところどころ「時雨るるや夕陽の中の赤蜻蛉」など貢太郎作の俳句が詠み込まれ、味わい深い作品となっています。

貢太郎は1929（昭和4）年6月20日から東京日日新聞・大阪毎日新聞の夕刊に「旋風時代」を連載し（前編は昭和5年6月11日まで）、一躍流行作家となりました。この書簡の書かれた昭和8年11月頃は「旋風時代」の後編を執筆中で、旅先でも「原稿は翌朝かならず書いてゐる」ほどの流行作家である貢太郎の多忙さを窺うことができます。

（学芸課／岡本美和）

受贈報告（平成23年6月～9月） 敬称略

▼**ひまわりの会**・「ひまわり（雲母会員エッセイ集）7集 ひまわりの会編刊」▼**植田 馨**・「続・たんじまんじの記 植田 馨著 猟書房刊」▼**猪野 睦**・「愛と死について タカクラ・テル著 葦會刊」▼**奥田俊博**・「風土記研究 第34号 奥田俊博著 風土記研究会刊」▼**横田晴光**・「冬の巡礼 志水辰夫著 角川書店刊」他 ▼**味元昭次**・「（句集）菫歌 たむらちせい著 蝶俳句会刊」▼**吉川弘文館**・「物部の民俗といざなぎ流 松尾恒一著 吉川弘文館刊」▼**南国市教育委員会**・「南国人物伝 南国市教育委員会編刊」▼**梅原久義**・「（句集）闇の音―『仮想と定理』残照― 梅原 乾著刊」▼**高知アララギ発行所**・「（高知アララギ六百号記念合同歌集）環 高知アララギ短歌会編刊」▼**西田 勝**・「田岡嶺雲全集 第3巻 評論及び感想 三 田岡嶺雲著 西田 勝編 法政大学出版局刊」▼**食野雅子**・「マジックツリーハウス30 ロンドンのゴースト メアリー・ポープ・オズボーン原作 食野雅子訳 メディアファクトリー刊」他 ▼**小松弘愛**・「中四国詩集2011中四国詩集編集委員会編 中四国詩人会刊」▼**名古きよえ**・「名古きよえエッセイ集『京都・お婆さんのいる風景』名古きよえ著 コールサック社刊」▼**沖積舎**「祖國の行方 鵜澤博句集Ⅳ 鵜澤 博著 沖積舎刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

高知県立文学館で朗読ワークショップを開催しました！

高知県立文学館では、〝朗読の勉強の機会がほしい〟〝もっと朗読技術の幅を拡げたい〟という皆様からのご要望にお応えして、初めての試みとなる4回連続の朗読ワークショップを開催しました。

ワークショップでは、声優・ナレーターとして活躍されている堀井真吾さんを講師にお招きし、プロならではの実践的な指導のもと、発声から本番まで一つの舞台をつくりあげました。

参加者のみなさんの真剣な姿勢を受けて、講師の堀井さんも非常に熱のこもった指導をしてくださり、各回とも、終了予定の時間を大幅に過ぎましたが、最後まで一人の欠席者もなく、本番まで全員が心を一つに集中して発表会に臨まれていました。

▲堀井真吾さんによる指導の様子

最終日の7月31日(日)には、多くの方が足を運んでくださり、朗読劇「幸福の王子」のグループそれぞれの舞台を味わってくださいました。

文学館では朗読事業にも力を入れており、朗読に関するイベントでは、気軽にどなたでも参加できる朗読フェスティバル(2月18日(土)開催)や、「朗読の会」(毎月第3土曜日開催)などを、随時開催しています。お気軽に、文学館までお問い合わせください！

(学芸課／野々村昭美)

▲発表会の後には受講者のみなさんに修了証が渡されました。

●出張朗読の会も好評活躍中！●

◆**10月20日(木) 10:00～**〈入場無料〉
出張朗読会「江ノ口さんさん会」
会場：江ノ口公民館
鈴木三重吉など、4作品の朗読

◆**10月27日(木) 18:30～**
出張朗読会「注文の多いカフェ」
会場：土佐町田井・ぽっちり堂
宮沢賢治作品の朗読
※参加無料(ワンドリンクの注文が必要です)

◆**10月29日(土) 14:00～**〈入場無料〉
出張朗読会「朗読会～文学のある風景」
会場：香南市・西川屋 赤岡本店「与楽亭」
和菓子のお話や赤岡を描いた作品の朗読

◆**11月5日(土) 14:00～**〈入場無料〉
会場：土佐清水中央公民館
出張朗読会「朗読会～文学のある風景」
土佐清水にゆかりを持つ田宮虎彦や出身の作家の作品などを朗読

◆**11月20日(日) 13:00～**
会場：高知県立牧野植物園 階段広場
出張朗読会「朗読会～文学のある風景」
牧野富太郎の随筆などを中心に朗読
※入園料が必要です。(会への参加は先着順)

朗読フェスティバル2012

出演者募集中！

高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しんでいただこうと、「朗読フェスティバル2012」を開催いたします。
朗読者として出演し、思い思いの朗読を披露してみませんか？

●申込しめきり● 11月30日(水)

ご期待ください！

すてきな特別ゲストも予定しています！

2012年 2月18日(土) 開催！

朗読すること―
それは
目で、耳で、声で、
文学を楽しむ
ということ。

●募集要項●

・**参加資格：** 個人・団体、プロ・アマチュアを問わず、県内で朗読活動を行っている方

・**募集人数：20組** ※応募者多数の場合、厳正な抽選の上、出演者を決定します。

・**申込み方法：**
「朗読フェスティバル2012」出演者募集のチラシ裏面の『「朗読フェスティバル2012」出演申込書』に必要事項を記入の上、朗読作品の朗読箇所のコピーとともに文学館へ送付、またはご持参ください。

詳しくはチラシをご覧ください。

●個人情報の取り扱い● 募集に際してお知らせいただいた個人情報は適正に管理し、「朗読フェスティバル」の活動に関してのみ使用いたします。

朗読コンクール開催！

毎年恒例の朗読コンクール、今年も県内3会場で小中学生を対象とした地区審査を行いました。

今年は参加者が大幅に増え、小学校42校、中学校14校、参加者153名が参加。各地区で熱戦を繰り広げました。いずれも心を打つ、素敵な朗読でした。

地区審査で選出された児童生徒のみなさんがつどう県審査は、11月13日(日)午後1時から、文学館で開催します。「かぎばあさんシリーズ」や『がんばれ！盲導犬サーブ』、『ナターシャ、チェルノブイリの歌姫』などでおなじみの手島悠介先生による記念講演会もあります。

児童生徒のみなさんによっていきいきとよみがえる文学の世界と、手島先生の多彩な世界をお楽しみいただける講演会は、一般の方でも無料でご覧になれます。みなさんお誘いあわせの上、ぜひ、文学館までお越しください。

（学芸課／永橋禎子）

高知県立文学館 第14回児童生徒文学作品朗読コンクール

朗読審査＆記念講演会

入場無料一般公開

会場：文学館ホール

日時：平成23年 11月13日(日) 13時～

- 審査(公開)：13時～14時35分
- 記念講演会：14時45分～15時45分
- 表彰式および講評：15時55分～16時15分

サイン会開催!!

コンクール終了後、会場にて手島先生の本を購入された方を対象にサイン会を行います。(先着80名様まで)

館長室から

「高知ペンクラブ結成40周年に思う」

元吉　喜志男

1971年2月13日に産声を上げた高知ペンクラブが、今年不惑の年40歳を迎えました。40周年を祝う8月の祝賀会には多くの関係者が集いました。

改めて「高知ペンクラブ会報(1号)」を読ませていただくと「高知ペンクラブ結成宣言」が掲載されています。そこには、「文芸作品の創造には、あらゆる文芸ジャンルの同志が人間的つながりを強めた上で、建設的な批評を通じて、文芸土壌をたがやす」ことが大切であるという初心が記載されています。

高知ペンクラブには、詩人や歌人(Poet)等のP、エッセイスト(Essayist)等のE、小説家(Novelist)等のNと、多彩な文芸ジャンルに携わる人達が集い、「総合文芸展」への取り組みや『高知文芸年鑑』の発行なども含め、様々な活動を通じて文字通り高知の文芸土壌を耕し本県の文化の向上に貢献してきました。

発足時の注目点の一つに「土佐近代文学館(仮称)」の建設構想があります。当時、わが国初の近代文学総合資料館としての日本近代文学館(1967年)は存在していたものの、この時代に高知の地に総合的文学資料館をという発想は、将来を見据えた大局的な視座だと言えましょう。

また、この度の結成40周年という節目の特別企画として、『わが戦後苦難の日々』が発刊されました。戦後66年を経て年を追うごとに戦争を体験した方からの生の声を聴く機会が少なくなっている今、戦争の悲惨さを風化させてはいけないという思いからの86人の方の証言は、「平和の尊さ」「命の重さ」を再考する上で、これから大変貴重な役割を果たすのではないかと思われます。

不惑の年から次なるステージへ「高知ペンクラブ」のさらなる発展を期待しています。

●ミュージアムショップより

『高知のパワースポット』(高知新聞社刊)入荷しました。9月に発行された市原麟一郎先生のご利益本の最新刊です。

縁結び、子授け、安産、入学合格、厄災除去など高知県内各地のパワースポットが、ご利益別に詳しく紹介されています。

現在開催中の『市原麟一郎　よみがえれ土佐民話展』で、神仏ご利益めぐりコーナーもございます。あわせてお楽しみ下さい。

また、ゴトゴト動くが、けっして落ちないところから、入学試験合格などにご利益があるといわれている高知市土佐山のゴトゴト石より「必勝合格鉛筆」「ゴトゴト石パワーストラップ」なども販売中です。

（事業課／岡崎由美子）

高知県立文学館ニュース　第55号　平成23年10月25日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX088-871-7857

高知県立文学館　カレンダー　10月～12月

企画展案内

市原麟一郎・よみがえれ土佐民話展

11月13日(日)まで好評開催中！

会　場：高知県立文学館2F　企画展示室　**会期中無休**

観覧料：400円（常設展含）　開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

土佐民話の第一人者である市原麟一郎さんの展覧会。民話紙芝居、戦争民話、神仏ごりやく巡り、土佐のおどけ者などテーマに分かれてご紹介します。会期中は市原さんご本人が毎日ガイドをしてくれます(予定)。

市原麟一郎展の紹介をしています！ 詳細は4ページをご覧ください。

太宰治と田中英光展

平成23年 11月26日(土)～平成24年 1月15日(日)　12月27日(火)～1月1日(日)は休館

会　場：高知県立文学館2F　企画展示室

観覧料：500円（常設展含）　開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

オリンピック出場経験を持ち、両親が高知県出身である作家・田中英光。英光の師であり、『走れメロス』などの名作で知られる作家・太宰治。本展では、作家としての足跡や、二人の交流と影響、高知との意外な接点などをご紹介します。

太宰治と田中英光展の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

企画展予告

横田稔 絵本の世界展

平成24年
1/21[土]～2/22[水]

高知市在住の版画家・横田稔さんの制作した絵本などを通して、絵と文学の素敵な出会いをお楽しみいただける展覧会です。

「はなの のびる おうさま」

星野富弘 花の詩画展

「小さな実(くみ)」(1995年)

平成24年
3/1[木]～3/31[土]

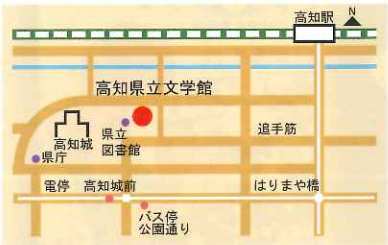
多くの人達の心に「生きることのすばらしさ」「生きる勇気」を静かにそしてやさしく、力強く語りかけ、深い感動を与え続けている原画の世界へ誘います。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
観覧料	一般350円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(朝倉(高知大学前)行または県庁前行)　「公園通り」下車　北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(またはバス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857